

塚本先生を偲んで

諸 富 隆

塚本澄子先生が亡くなられた。安らかで穏やかな最後だったとご主人から伺った。先生は、十数年間に及ぶ癌との闘いを強靱で明朗な精神を持って賢く闘い抜かれた。

2001年の暮れも押し迫り、新年を迎える準備を始めようとしていた時に、東北大学の友人から私の札幌の自宅に電話が入った。栃木に作新学院大学という大学があるが、その女子短期大学の文系学科を改組して4年制の人文系の学部を作ろうとしている。しかし、学部長になる人がいない。心理系の方がよいらしいが、後輩が探すのに大変苦勞をしている。手伝ってくれないかとのことだった。その後輩が塚本先生だった。その後すぐに、塚本先生から電話があり、来年の4月に文部省に書類を提出し、6月に大学設置審の審査を受けたい、そのためにはどうしても学部長が必要である、学部長になってほしい、とのことであった。本当に急な話だった。私は、定年まで3年数ヶ月を残していた。1月早々に理事長と短大学長にお会いした。そこで、お二人から新設予定の人間文化学部の説明と大学の厳しい状況について話があった。説明をきき私は学部長を引き受けることにした。

このようにして学部の理念やカリキュラム等について塚本先生とのやりとりが始まった。私の考えは簡単だった。大学は学問の場であり、真理探求の場である。大学はそのことを基本的に追求しなければならない。しかし、それに加えて作新学院大学は、地域にある大学である。そうであれば、大学は、地域に根差し、地域とともに歩み、地域の要求する課題を解決し、地域に積極的に貢献する人材を育てることが重要な任務となる。人間文化学部もそのことを明確に考えるべきである。私は、「学問を教えるとともに、実践を教えることによって実践力や課題解決能力を高める」ことを学部教育の基本に置くこととした。そのための一つの試みが、アメリカのポートランド州立大学等が行っていた地域の教育力を学生の教育に導入するということだった。塚本先生は、この考えを積極的に支持され、カリキュラムの主要な柱として実践教育科目群を立てられた。全国の大学でも例を見ない大学・地域連携教育プログラム（キャップストーンコース）の誕生である。

人間文化学部のカリキュラムは、教養・共通教育科目群、専門教育科目群ともよく整備されている。それに加えて実践教育科目群がカリキュラムの重要な柱として立てられていることが、人間文化学部のカリキュラムの大きな特徴となっている。専門教育科目群は、社会学・心理学・文化学の3領域から構成され、開講される科目は、専門学部・学科以上に豊富で、それらの科目構成はよく吟味されている。さらに資格取得への配慮も行き届いている。それらは塚本先生を中心に学部教授会が相当に時間をかけて、カリキュラムを丹

念に検討した結果であることをよく表している。

塚本先生は学科長として、新設の人間文化学部のカリキュラムの現実化と教育の安定に力を注がれた。しかし、残念なことに設置2年目の終わりに癌が再発し、学科長は池上先生に引き継がれた。その中で人間文化学部の教育は着実に成果を上げ、学生の発達を心から願う教員の質の高い教育は、学生の成長を確実にしている。

塚本先生は、作新学院大学における私の心の支えとして存在した。塚本先生も私も、作新学院大学が、大学の本質としての学問の営みを中心とする大学に成長していくことを心から願っていた。今、大学の本来のあり方を知る塚本先生を失ったことは、人間文化学部、引いては作新学院大学にとって大きな損失である。私達は、この損失を真の大学を創造する日々の営みによって埋めなくてはならない。この損失を埋める地味な営みが、塚本先生が望んだ学問を中心とする教育・研究の場としての大学の復活を可能とするであろう。

さて、大学の構成員にとって重要なことは、希望を語ることである。私は、作新学院大学において、評論や批判は行っても希望を語る人に余り出合っていない。希望をなくした時、人は容易に死に至る。塚本先生は希望を語る数少ない人であった。塚本先生は最後まで、学問と教育への情熱、学生への愛情を失うことがなかった。先生の最後の論文「挽歌をよむ女」は、天智天皇崩御に際して皇后等の5人の宮廷の女性たちが天皇の魂を鎮め、天皇を追慕して詠んだ挽歌を取り扱ったものである。論文を書くには、それ相当の気力と体力を必要とする。この論文を書かれた時、先生の体調と心の調子は多少上向きの状態にあった。この論文が恐らく最後の論文になるだろうと言われながら、先生は論文を仕上げられた。万葉集の特異なジャンルを構成する万葉挽歌が、5人の宮廷女性の天智天皇に対する鎮魂と追慕の情を自らの言葉による一回限りの歌として詠むことによって創出されたことを明晰な文章によって述べられている。

ところで、塚本先生は、枝に花のみを付け満開となる桜をこよなく愛された。花は一瞬にして散り明るい緑に変わる。その対比の妙を好まれた。先生は、平成20年春の桜を、ご主人と共に満喫された。先生のご冥福を心から祈る。合掌。